

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター 所長

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 3 号について

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 3 号を発表したので送付します。

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 3 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	1 葉いもち	並	2
	2 紋枯病	並	2
	3 ウンカ・ヨコバイ類	やや多	2
	4 斑点米カメムシ類	やや少	2
普通期水稲	1 葉いもち	並	3
	2 ウンカ・ヨコバイ類	並	3
	3 コブノメイガ		3
	4 ニカメイガ		3
	5 スクミリンゴガイ	並	3
野菜・工芸作物全般	1 アブラムシ類	並	4
	2 ハスモンヨトウ等チョウ目（鱗翅目）害虫	並	4
ウリ類	1 黄化えそ病(MYSV)		4
いちご(親株)	1 炭疽病		5
果樹全般	1 果樹カメムシ類	並	5
カンキツ (露地栽培)	1 黒点病	並	6
	2 かいよう病	やや多	6
	3 ミカンハダニ	やや多	6
	4 チャノキイロアザミウマ	並	6
茶	1 炭疽病	やや多	7
	2 カンザワハダニ	並	7
	3 チャノコカクモンハマキ	並	7
	4 チャハマキ	並	7
	5 チャノホソガ	やや多	8
	6 チャノミドリヒメヨコバイ	並	9
	7 チャノキイロアザミウマ	やや多	9
	8 クワシロカイガラムシ	やや多	9

は防除情報を発表予定

作物の生育状況（6月中旬）

早期水稲は穂ばらみ期、普通期水稲は移植前後、うんしゅうみかんは果実肥大期、茶は二番茶摘採前後であった。

向こう 1 か月の気象予報

天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込み。気温は高い確率 40%、降水量は平年並の確率 40%、日照時間は平年並の確率 40%と予想されている。

（1 か月予報 鹿児島地方気象台 6 月 2 8 日発表）

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

平成25年度病害虫防除情報第4号（7月上旬発表予定）参照

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査における葉いもちの発生面積率18.8%（平成13.8%）、発病株率1.4%（平成2.7%）はいずれも平成並である。
- (2) 6月のアメダス観測結果を基にしたBLASTAM判定によると、本病の感染好適日が県内各地域で複数回出現している。

[防除上の注意]

- (1) 葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実に行う。
- (2) 雨が続く場合、感染の危険性が高いので雨間をみて防除を行う。

2 紋枯病（並）

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査では発生未確認である。
（平成値：発生面積率0%、発病株率0%）

[防除上の注意]

- (1) 穂ばらみ期の防除が基本となるが、上位葉鞘への進展が続く場合は2回目の散布を行う。

3 ウンカ・ヨコバイ類（やや多）

[予報の根拠]

- (1) 6月下旬の巡回調査におけるヒメトビウンカの発生面積率93.8%（平成68.4%）は平成より多、すくいとり虫数14.9頭（平成7.7頭）は平成よりやや多である。
6月下旬の巡回調査におけるツマグロヨコバイの発生面積率75.0%（平成63.3%）は平成よりやや多、すくいとり虫数19.5頭（平成7.9頭）は平成より多である。

[防除上の注意]

- (1) ヒメトビウンカは縞葉枯病のウイルスを媒介する。本虫の生息密度が高いことから今後の発生が懸念されるため、無人ヘリ防除や個人防除を実施していない圃場ではツマグロヨコバイと併せて防除する。

4 斑点米カメムシ類（やや少）

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬のほ場でのすくい取り調査による発生面積率6.3%（平成14.5%）、すくい取り虫数0.1頭（平成1.7頭）はいずれも平成よりやや少である。
- (2) 6月上旬の水田周辺におけるイタリアンライグラス等飼料作物ほ場での生息密度（20回振りすくい取り）は、県全体平均28.5頭（平成41.3頭、前年54.6頭）で平成並である。

[防除上の注意]

- (1) 例年、カメムシによる被害は早期米の等級格下げの重要な要因となっている。米の上位等級確保のためには、穂揃期とその7～10日後の2回防除を厳守する。その後も発生が見られる場合には追加防除を行う。
- (2) 出穂の早い水田や特に遅い水田には集中的に飛来する恐れがあるので注意する。
- (3) 防除効果を高めるため、一斉防除に努める。

普通期水稻

1 葉いもち (並)

平成25年度病害虫防除情報第4号(7月上旬発表予定)参照

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査では発生未確認である。
(平年値:発生面積率1.2%、発病株率0.1%)
- (2) 6月のアメダス観測結果を基にしたBLASTAM判定によると、本病の感染好適日が県内各地域で複数回出現している。
- (3) 天気は、平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は平年並または高い確率とともに40%、降水量は多い確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 本田での初発生に注意し、初期防除を徹底する。雨が続く場合、感染の危険性が高いので雨間をみて防除する。
- (2) 苗いもちが発生していた場合、本田への持ち込みにより今後蔓延しやすいので防除を徹底する。

2 ウンカ・ヨコバイ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査におけるツマグロヨコバイの発生面積15.8%(平年6.1%)、株当たり虫数0.03頭(平年0.0頭)はいずれも平年より多である。
- (2) 6月中旬の巡回調査におけるウンカ類の発生は未確認である。
(発生面積の平年値:セジロウンカ0.2%、ヒメトビウンカ1.3%)
- (3) セジロウンカの初飛来を5/29に延岡市の予察灯において、トビイロウンカの初飛来を6/18に延岡市の予察灯において確認している。

[防除上の注意]

- (1) 育苗箱施薬剤を実施したほ場では、薬効期間や発生状況を考慮して防除する。
- (2) セジロウンカは、株当たり虫数が4頭以上になると稲の生育が抑制されるので早めに防除する。
- (3) セジロウンカ及びトビイロウンカについては、病害虫防除・肥料検査センターのホームページ等で提供する飛来情報に注意する。

3 コブノメイガ

[防除上の注意]

- (1) 本年度は、6月2日に本県への初飛来が確認された。防除適期は、飛来世代の次世代の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的であるので、病害虫防除・肥料検査センターのホームページ等の病害虫発生動向に注意する。

4 ニカメイガ

[防除上の注意]

- (1) 近年、宮崎県中部の早期・普通期水稻や飼料用稲の混交地帯で増加傾向にある。
- (2) 早期水稻と普通期水稻の混交地帯では、越冬世代の発生が早まっており、4月中旬頃に発蛾最盛期を迎え、次世代成虫の発生も6月中旬に確認されている。
- (3) 7月上中旬頃に発蛾最盛期を迎えると予想され、防除適期は発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的であるので、本田防除を行う。

5 スクミリンゴガイ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率39.5% (平年19.0%) は平年よりやや多、 m^2 当たり貝数0.3頭 (平年0.3頭) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 水稻の被害は、田植え直後から3週間で著しく、その時期に深水状態ほど被害が激しいので、活着後は浅水で管理する。
- (2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を行う。
- (3) 粒剤の水面施薬に際しては、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも7日間はかけ流しや落水はしない。

野菜・工芸作物全般

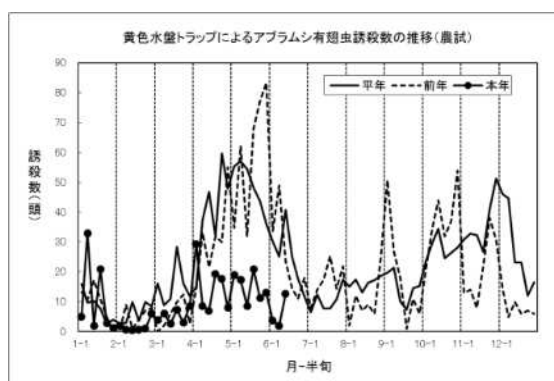
1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 黄色水盤トラップ (宮崎市佐土原町) による誘殺数は平年並で推移している。

[防除上の注意]

- (1) 各種のウイルス病を媒介するので、発生初期の防除に努める。
- (2) 一部のネオニコチノイド剤に対する感受性が低下した個体群が確認されたので、使用した薬剤の効果を確認し、同一の薬剤を連用することは避ける。



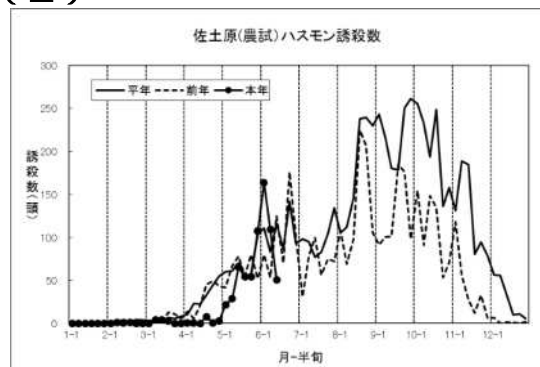
2 ハスモンヨトウ等チョウ目(鱗翅目)害虫 (並)

[予報の根拠]

- (1) フェロモントラップ (都城市、国富町、西都市、佐土原町) によるハスモンヨトウの誘殺数は平年並で推移している。

[防除上の注意]

- (1) 早期発見に努め初期防除を徹底する。



ウリ類

1 黄化えそ病 (MYSV)

[防除上の注意]

- (1) 本病は、一部の地域で発生が確認されており発生拡大が懸念される。
- (2) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬され、発生後は急激に蔓延する恐れがあることから、今後嚴重な警戒が必要である。
- (3) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的に防除するとともに、誘殺のための有色粘着板の設置やほ場周辺の除草に努める。
- (4) 本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの西臼杵支庁・農林振興局 (農業改良普及センター) または病虫害防除・肥料検査センターまで連絡する。

いちご(親株)

1 炭疽病

平成25年度病害虫防除情報第5号(7月上旬発表予定)参照

[防除上の注意]

- (1) 5月中旬から6月上旬にかけて調査ほ場の親株から採取した葉を検定した結果、感染ほ場率63.7%(H24:58.3%、H23:63.7%)は過去8年間で最も高く、感染株率11.8%(H24:17.5%、H23:28.2%)は過去8年間で3番目に高いため注意が必要である。
- (2) 育苗床をこまめに見回るとともに親株の簡易検定を実施する等、本病の早期発見に努め、感染株(疑わしい株を含む)が確認されれば、感染株に隣接した株も感染の恐れが高いため、あわせて廃棄処分する。
簡易検定マニュアルは宮崎県農薬安全使用啓発ホームページに掲載。
- (3) 感染した株を圃場近くに放置すると、大雨等により病原菌が拡散する恐れがあるため、苗床や栽培ほ場からできるだけ離れた場所に埋却する等適切に処分する。
- (4) 健全な親株の定期的な更新に努める。

また、ハダニ、アブラムシも発生量が多いため注意する。

果樹全般

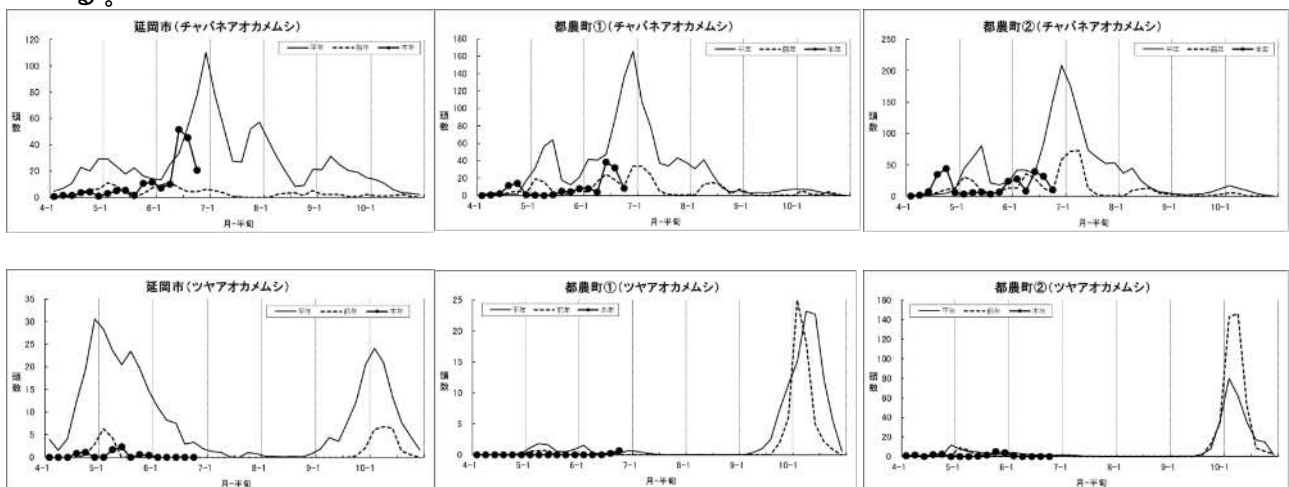
1 果樹カメムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 県内3か所(延岡市、都農町、都農町)に設置したフェロモントラップ調査における誘殺数は、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシともに平年並~やや少ない状況で推移している。

[防除上の注意]

- (1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- (2) 成熟・着色の早い果実を集中加害する傾向があるので、今後ナシ等は特に注意する。



カンキツ(露地栽培)

1 黒点病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査における春葉での発生面積率5.6% (平年12.7%)、発病葉率0.2% (平年2.1%) はいずれも平年並である。
- (2) 向こう1か月の降水量は平年より多い確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 感染源である枯れ枝の除去に努める。
- (2) 降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算降水量300mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行う。

2 かいよう病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の春葉での発生面積率22.2% (平年16.8%) は平年並、発病葉率2.4% (平年1.4%) は平年よりやや多である。
- (2) 中晩柑類の6月中旬調査では発生面積率50.0% (平年27.2%) は平年よりやや多、発病葉率5.3% (平年2.2%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 発病した枝葉は、伝染源となるため可能な限り除去し、園外に持ち出し適切に処理する。
- (2) 梅雨期に予防散布する。
- (3) 風雨による枝葉の損傷を軽減するため、防風垣等を整備する。
- (4) 台風の襲来が予想される時は、事前に薬剤散布を行う。
- (5) ミカンハモグリガの被害は、格好の病原菌侵入口となるので、夏秋梢の発生の多いほ場では防除を徹底する。

3 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率55.6% (平年20.4%)、寄生葉率3.56% (平年1.25%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に防除を行う。
- (2) 同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

4 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
平年値 (発生面積率3.4%、寄生果率0.16%)

[防除上の注意]

- (1) 5月中旬から9月上旬の間、数回防除する。
- (2) 防風垣にイヌマキが植栽されているほ場では、その新芽にも寄生するので同時に防除する。
- (3) きんかん栽培では、アザミウマ類による果実の被害が発生するので、花等への寄生状況に十分注意するとともに、開花~幼果期における防除を徹底する。

茶

1 炭疽病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率64.7% (平年32.7%)、 m^2 当たり病葉数7.1葉 (平年6.0葉)はいずれも平年よりやや多である。
- (2) 天気は、前半は平年と同様に曇りや雨の日が多く、気温は平年並または高い確率とともに40%、降水量は多い確率40%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 二番茶残葉に炭疽病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除する。

2 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率47.1% (平年45.0%)、寄生葉率4.4% (平年6.6%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のロ-テ-ション散布を実施する。

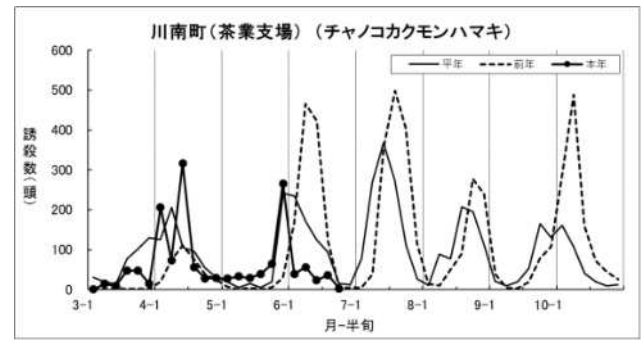
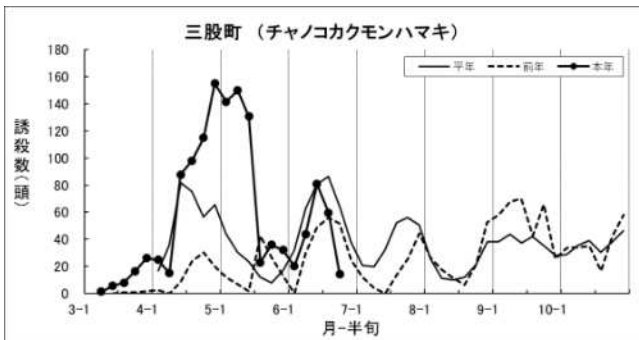
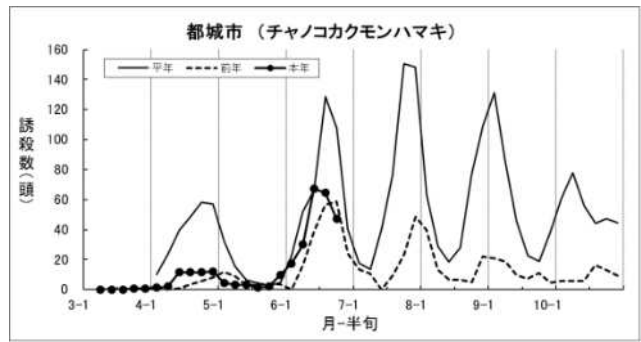
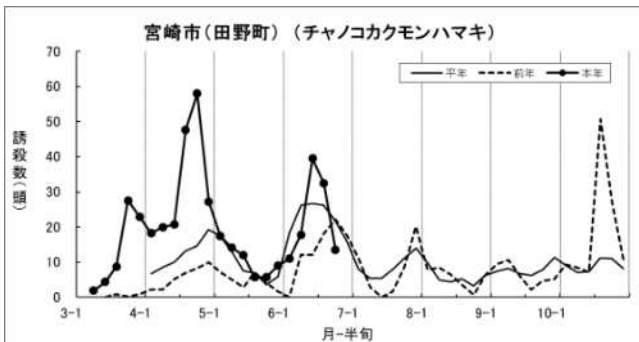
3 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の巡回調査では発生を認めていない。
平年値 (発生面積率1.2%、 m^2 当たり虫数0.1頭)

[防除上の注意]

- (1) 県内4か所 (都城市、三股町、宮崎市田野町、川南町) に設置しているフェロモントラップ調査によると、次の発蛾最盛期は7月中～下旬と考えられる。
- (2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、発蛾最盛期の10日後であるが、この時期は紫外線が強く顆粒病ウイルスの活性が低下しやすいので、曇天日や夕方に散布する。



4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

(1) 6月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

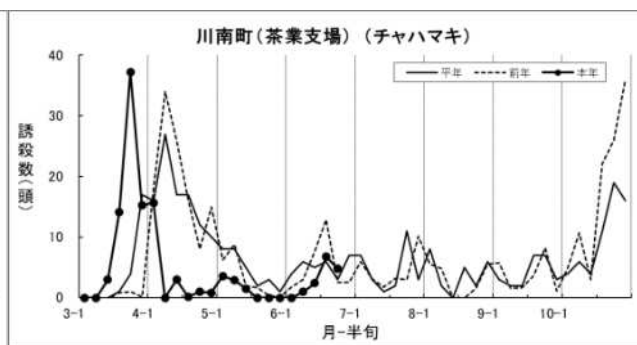
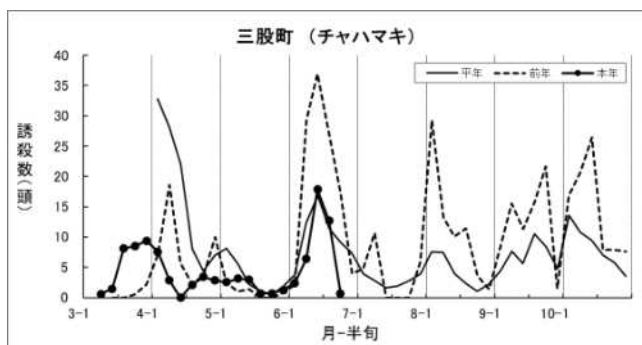
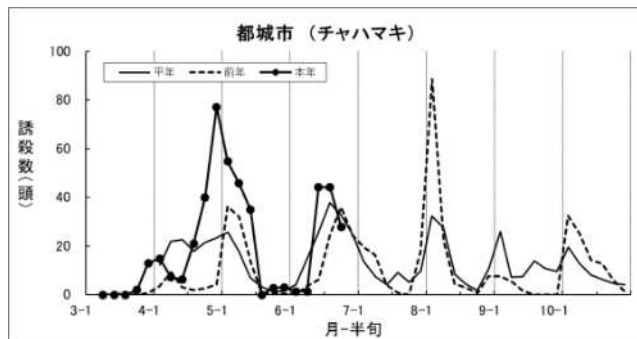
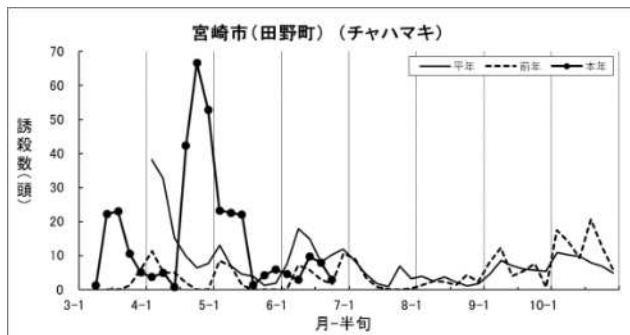
平年値 (発生面積率2.3%、 m^2 当たり虫数0頭)

[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査によると、次の発蛾最盛期は7月中下旬と考えられる。

なお、一部地域で誘殺数が多いので今後の発生に注意が必要である。

(2) チャノコカクモンハマキの発蛾最盛期と10日以上差がなければ同時防除する。



5 チャノホソガ (やや多)

[予報の根拠]

(1) 6月中旬の発生面積率23.6% (平年23.4%) は平年並、 m^2 当り巻葉数5.6葉 (平年0.8葉) は平年より多である。

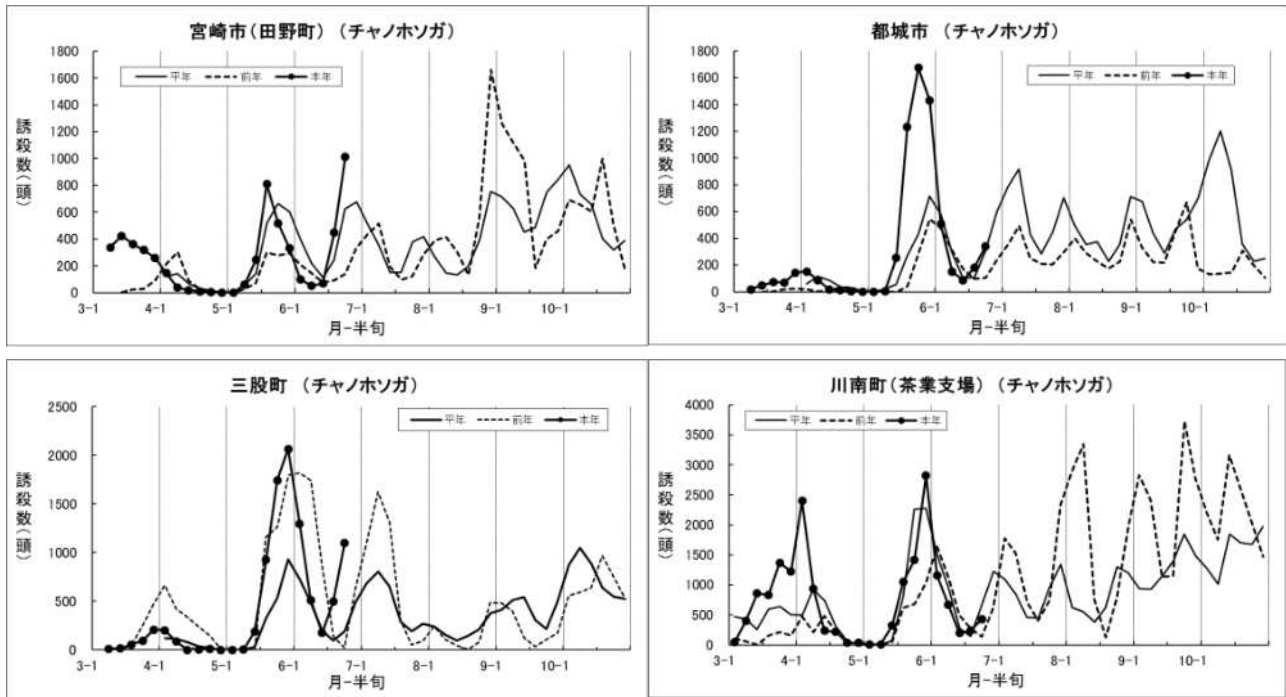
[防除上の注意]

(1) フェロモントラップ調査による前回の発蛾最盛期は5月中下旬であり、次の発蛾最盛期は7月上旬頃と考えられる。

(2) 三角巻葉前に防除することが必要で、発蛾最盛期の約10日後 (葉裏の表皮下でトンネル状に潜孔している時期) が防除適期である。

(3) 脱皮阻害剤は、卵期～皮下潜葉期に散布する。

(4) 巻葉が見られた茶園では、多発する恐れがあるので注意する。



6 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の見取り調査による発生面積率41.2% (平年32.9%) は平年よりやや多、寄生葉率1.8% (平年2.1%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 萌芽直後から1、2葉期を重点に防除する。

7 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の見取り調査による発生面積率70.6% (平年62.7%)、寄生葉率9.9% (平年6.4%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 三番茶を摘採する園では、新芽生育初期に加害されると減収程度が高いため、萌芽期の防除が重要である。
 (2) 深刈りなどの更新処理を行った園では、茶芽の生育期間が長く、被害を受けやすいので残効の長い薬剤で防除する。

8 クワシロカイガラムシ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 6月中旬の発生面積率58.8% (平年39.0%) は平年よりやや多、寄生株率31.8% (平年14.4%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は、幼虫ふ化開始から1週間後または幼虫ふ化最盛期なので、ふ化状況をよく観察して防除する。
 (2) 薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

農薬危害防止運動

6月1日から8月31日までの3ヶ月間、農薬危害防止運動を実施しています。農薬散布にあたっては、ラベル表示の確認を十分に行い、農薬使用基準を遵守し、危害防止に努めましょう。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

- 3 発生量（程度）の区分

多い	（高い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	（低い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 （平年値は過去10年間の平均）

- 4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報……向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報……主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報……主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報……県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報……注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。

ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。

【文書取扱】

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター 倉富

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp